麻生 玲子
illustration
桃山 恵
二番目の男

二番目の男

《立読み版》

麻生　玲子

イラスト　桃山　恵

1

「じゃあ、抱いてくれますか」

大平知太（おおひらはるた）は挑むような視線で上司の真田（さなだ）を見つめた。

会社を辞めるつもりだと、彼に話したその日のことだった。相談があると、仕事の後に時間をとってもらった。真田は気さくに承諾し、飲みに誘ってもらったのだ。

笑い飛ばしてもらっていいと思った。どうせ辞めるのだし、立つ鳥跡を濁さずだなんて、自分には関係ないと多少自暴自棄にもなっていた。

店を出て、駅に向かって歩いていた。辞める本当の理由を話してくれないのかと、真田に言われた。もう、隠すことすら辛くて面倒だったのだ。

「俺は、同性が好きなんです」

今まで誰にも告白したことはない。そして大平は、誰とも付き合ったことがない。

本当だったら、誰にも言うつもりなどなかったのだ。だが、真田があまりにも無神経に見えてしまい

――もちろん大平の思い込みなのだが――すべてを壊してしまいたくなった。

大好きな上司だった。本当に、焦がれていた。姿が見えるだけでもいいと思い、それを励みに仕事をしてきたはずだったのに……。

酒の力というのは恐ろしいと、大平はどこかで冷静に思っていた。話している自分と考えている自分とが、別々に人格を持っているようだと、他人事のように思っていた。

――終わりだな。

心の中で自嘲する。すべて終わりだ。会社を辞めるのと同時に、人間関係もキャリアも何もかもを、一度リセットするのだ。

そのために、一度壊さなくてはならない。新しいものを作るためには、古いものを壊すことが必定だ。

話の流れに無理があったのかなかったのか、そんなことはもうどうでもよかった。ただ、酒の勢いで多少皮肉な口調を装い、真田が断るのを前提にそう言った。

――だいたい、抱いてくれますかって何だよ。今まで一度も、そんな経験がないくせに。

自分を嗤(わら)う。冗談にしたって、ずいぶんと思い切ったことを言ったものだ。

否定的な言葉か、驚きを含んだ拒絶か、笑いでごまかすのか。いずれにしろ、真田の応えは喜ばしいものではないはずだが、心構えができているので傷ついたりなんかしない。

むしろ、明確な拒絶をしてもらえば、辞めることを自分の中で正当化できるとさえ大平は思っていた。

「いいよ」

だが、真田の答えは予想外のもので、大平はうまく対応できなかった。

「……え？」

「抱いてやる」

彼の言葉に、大平の表情がこわばった。

三十にもう少しで届く年齢のくせに、大平はひどく若く見える。職場や得意先にも『清潔で爽やかで、それがちょっとイヤミ』と言われるくらいだった。

その彼が戸惑う表情を浮かべたことで、答えた真田の方には笑う余裕さえあった。

「何、冗談言ってるんですか」

引きつった笑いを無理に作って、大平が返す。変に喉に力が入ってしまって、声が掠れていた。

「こんな冗談に、そんな返しって……」
「お前のことは理解しているつもりだ。そんなことを冗談で言う奴じゃない」
買いかぶりもいいところだと言ってしまいたかった。だが、そんな風に思ってくれていることが、嬉しくもあったのだ。
「だったら余計――」
「冗談にしてほしかったのか？」
アルコールが入っていてさえ、真田の声は深く落ち着いていた。
誰も憧れる上司なのだ。大平の課で課長を務め、去年部長になったばかりだ。昇進は飛び抜けて早かったわけではないが、実力と人望は飛び抜けている。
その彼にそんなことを言わせている自分に、大平は自己嫌悪に陥る。唇を噛んで俯き、異様なほど大きな鼓動を意識した。
自分で煽ったくせに、その後の展開など考えていなかった。現実は往々にして人の想像を遥かかに超える。今がまさにそのときだった。

「……あの……」
大平の表情は、迷子の子供のようだった。そして真田は、その表情を見つめながら小さく笑って携帯を取り出す。
「ホテルを探す」
「え？」
「ちょっと待ってろ」
目の前の真田の言動はまるで現実味がなかった。大平は、ただ呆然と彼がホテルの予約を取るのを見つめていた。
――悪い冗談みたいだ。
ホテルで、真田が浴びているシャワーの音を聞きながら、大平は思っていた。
本当に、冗談にしてしまうつもりだったのに、真田はそれを許してくれなかった。それどころか、冗談に紛れ込ませた大平の真実を探り当ててくれた。
それだけでも十分なのに。

――あの人は、最後だからと、俺の望みをかなえてくれようとしている。

部下の希望をかなえる……それだけの理由で、男の自分を抱けるのだろうかと訝る気持ちもある。その一方で、彼に抱かれたらどうなってしまうのかという不安もあった。

恐怖と不安に体がすくむような思いで、カチャリというドアが開く音に目を閉じる。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

二番目の男

《立読み版》

発行日　２０１２年２月１７日
著者名　麻生　玲子
イラスト　桃山　恵
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Reiko Asou 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。